

一 一月例会 発表要旨

特集

線と境界の想像力

——鉄道と文学の一五〇年

【特集の趣旨】

運営委員会

二〇二二年に開業一五〇年を迎える日本の鉄道は想像力の拡張に寄与し、文学やメディアの流通地図を拡大させ、都市と地方の文化的な均質性をもたらした。一方で両者を明白に線引きし、地方という枠組みからも取りこぼされる場を形成したが、本特集ではこの社会空間を鉄道文学がいかに表象してきたかを明らかにすべく、鉄道という〈線〉が形成した〈境界〉概念を導入する。

東京から線条的に進む鉄道は中央―地方を接続しながら分断をも生み、その反復によって概念的な境界を生産してきた。例えば鉄道

が円滑化したツーリズムは紀行文や鉄道小説を著す想像力の源泉となる傍ら、当該エリアを〈観光地〉という枠組みで境界化するまなざしが働いた。なかでも吉田初三郎の鳥瞰図は国土を記号化し、如上の境界を視覚的に捉える土台として共有された。また内地と外地が一枚絵の中で接続され、国境が無化される錯覚を与えたと推察される。

外地の鉄道は実体的に、満洲やサハリンという本来結びつかない境界を結びつける役割をも果たしたが、林芙美子「樺太への旅」には国境横断に伴う困難性が示唆されている。

満鉄が出資した満洲映画協会はプロパガンダ映画を製作する一方で、文化交流の場を形成した側面も持つ。戦時下の越境表象に鉄道がいかに組み込まれたかも検討課題である。

時間軸を戦後へ広げれば、松本清張は『点と線』等で鉄道による移動を通して、地域間のインフラ格差など高度成長期の裏での歪みを描出した。新幹線開業は戦後の空間形成にあたり大きな分岐点となり、東京を中心とする線の秩序は一層強化されたが、経済成長という大きな物語が閉じられ経営合理化のもとに縮小・淘汰される路線が発生し、現在進行形で分断が進みつつある。三陸鉄道は経営難のなか東日本大震災に遭い、路線が文字通り分断される被害を受けた。対してドラマ「あまちゃん」では幹線から分離・切断されながらも、地域の中心として新たな価値をもつ一種のユートピアイメージが提示された。

昨今、新型コロナウイルス感染症予防のため移動の自粛が迫られ、地方インフラの縮小に拍車がかかるなか、いずれ鉄道文学は地方鉄道や廃線へのノスタルジーが主流となり、ジャンル自体のアナクロ化を免れない可能性も視野に入れねばならない。記念の年に強調されるであろう、鉄道と国家の発展を比例させる史観を相対化しながら、接続／分断を繰り返す境界という視座のもと、鉄道文学の新たな相貌を捉えたい。

近代ツーリズムと作家の旅

——『日本八景』の紀行文を中心に——

田中 励儀

日本の近代文学は、(鉄道発祥の時代)から、各地に路線網を広げていく(鉄道発達時代)に寄り添う形で展開していった。鉄道は、江戸期以前には想像もできなかった、人々の急速な移動をもたらし、見知らぬ他人同士が思わぬ接点を持つ装置としての役割を果たした。

たとえば、慶長元和の頃、琵琶湖付近の景を中国の瀟湘八景に擬して作られた(近江八景)が、昭和改元期には、新聞社が企画した(日本八景)へと全国規模に拡大された。「新日本の勝景」を選定するに際し、読者から九千三百四十万票を超える投票があったという。交通機関の発達によるツーリズムの隆盛が反映した『日本八景』(昭和三・八、大阪毎日新聞社)は、現地に派遣された露伴・花袋・白秋・虚子らの紀行文集である。雄大な車窓の景色を誇った根室本線狩勝峠を行く河東碧梧桐、鉄道・自動車・人力車・駕籠、さ

まざまな乗り物で十和田湖を行く泉鏡花を中心に、作家が持つ観光客としてのまなざしを論じたい。その際、企画に関連して作成された吉田初三郎作画『日本八景名所図絵』(昭和五・八、主婦之友社)をはじめとする鳥瞰図や絵葉書、当時のガイドブックを参照して、観光のあり様を考える。

泉鏡花は、大正期には狩勝峠とともに日本三大車窓のひとつに数えられる篠ノ井線姥捨駅を訪れ、「魔法罫」や「唄立山心中一曲」を著している。江戸期から田毎の月で知られる名所がどのように描かれたのか、観光が幻想小説を生み出す経緯にも言及したい。明治期に鏡花が故郷金沢と東京を往復する際に用いた実用としての鉄道は、路線の延長や付け替えが盛んに行われ、地方の風景や社会を変えた側面もある。

昭和改元期のツーリズムの再現を核としつつ、明治・大正期の作家の旅も参照して、「鉄道と文学の一五〇年」を考える契機としたい。

外地の鉄道と文学

——「白蘭の歌」におけるプロバガンダ・

メロドラマ・アダプテーション

川崎 賢子

一九〇六年、前年締結のポーツマス条約によってロシア帝国から譲渡された東清鉄道南満洲支線とこれに関係する鉄道事業と付属事業の経営のために、半官半民の南満洲鉄道株式会社が設立された。同年南樺太には、樺太軍用軽便鉄道が竣工し、翌年の樺太庁発足以降、鉄道路線の整備が試みられた。満鉄は満洲事変の後、ソ連側から北滿鉄路を譲渡され一九三四年には特急「あじあ」の運転開始、ついで日満間における鉄道売却の契約が成立一九三五年には満洲国所有の国策会社となる。外地の鉄道会社は、植民地経営の中枢を担った。

大陸の鉄道に対する日本近代文学のまなざしは、拡大する帝国を視察する視角、ツーリズムの視角を主としたが、サガレン(樺太)で挽歌を綴った宮沢賢治や、樺太の車窓から

「墓場」のような山野を捉えた林美美子は、他界に向かう線としての鉄道の道行を幻視している。いっぽう台頭する満洲の日本語文学にとって鉄道は宣撫活動の大動脈であり、愛路の対象でもあった。時間軸で考えるなら、伊藤博文暗殺を挟んで連載された夏目漱石「満韓とどこどこ」に見えたものと見えなかったものに始まり、ソ連参戦後、抑留者として長谷川四郎や石原吉郎が見ることを禁じられながらシベリアの収容所へと送り出されるまでの軌跡がある。

このような見取り図の中に、久米正雄「白蘭の歌」(一九四〇)を置き直して再読したい。李香蘭・長谷川一夫主演映画「大陸三部作」(「白蘭の歌」「支那の夜」「熱砂の誓ひ」)の皮切りとなった原作小説である。日満の合作企画、助成の産物であり、日満友好のプロパガンダと民族を越えた恋愛というメロドラマの装置として外地の鉄道は重要な機能を果たしている。物語の奇妙な屈曲、プロパガンダとメロドラマの葛藤と挫折、映画化にとどまらないアダプテーションなど、問題含みのテクストであり、「線」の思考に抗う要素が多々指摘されるはずである。

清張ミステリーと鉄道

——日本近代が見えてくる

綾目 広 治

松本清張は膨大な作品を書き残したが、その内のほぼ半数の作品に、鉄道に関わる言わばアイテムが登場すると言われている。それらのアイテムは、ミステリー作品の場合では、いずれも小説内の犯罪やその謎および謎解きと深く関わるものである。たとえばそのアイテムは、「点と線」では列車食堂の受取書や、さらにはプラットホームという場であったりする。「顔」では客車という空間が重要な役目をし、また「花実のない森」では切符が謎解きの切っ掛けとなるものとして出てくる。あるいは犯罪の遂行という点においても、「死の發送」では貨物列車が犯罪のトリックに使われたり、「眼の壁」では駅の待合室や「普通客車の座席」が犯罪に利用されていたりする。

このように松本清張は、鉄道に関わる様々なアイテムを用いて多くのミステリー作品を

書いているのだが、鉄道もJR(旧国鉄)だけでなく、また小田急、東急、名鉄、京阪、近鉄、西鉄などの大手私鉄だけでもなく、いわゆる中小の私鉄も多く登場させていて、清張の小説にとっていかに鉄道が重要な働きをしているかを知ることができる。

本発表では、それらの鉄道や鉄道アイテムの用いられ方の諸相を見ていきたい。それとともに、鉄道が日本の近代社会を作ったという点、少なくとも近代社会が作られるにあたって大きな役割を果たしたという点に眼を向けるならば、松本清張は鉄道が登場するミステリー作品を通して、日本の近代社会のあり方を期せずして描いたということにも言及してみたい。そのことは、たとえば清張の小説作品の舞台がほとんど全国津々浦々にわたっているのは、彼自身の旅への憧れからくるものがあつたからであるうが、実は近代社会のツーリズムを代弁していたという問題にも繋がると考えられる。

本発表では、その辺りの問題にまで論及してみたい。

「そきへの極み」への旅

——サガレン鉄道紀行

梯 久美子

あらゆる列車は歴史の上を走る。

バラストが砕けて砂になり、枕木がコンクリートに替わり、レールが敷き直されても、それらを支える地面は変わらずそこにある。そして、自分の上を通っていった者たちの物語を記憶するのだ。

生きかわり死にかわりしながら、軌道の上に見えない層をなす人々。そこをまた別の人生が駆けてゆく。

小学生のころ、母親くらいの年齢の知らない女の人と、汽車に乗り合わせる夢を見た。その人はむかしこの汽車に乗っていて、いまはもう死んでいるのだということを、夢の中の私は知っている。だが私は怖くなかった。少し離れたボックスシートに座り、車窓の景色を眺めていた。

一〇歳かそこらだった私が、鉄道で旅をすることの本質をすでに体験していたことに、

いまになって驚く。死者とは「むかし生きていた人」のことだ。その彼／彼女たちと、時空をこえて、つかのま、同じ軌道をゆく。身体がここではないどこかへ運ばれている間、魂は過去といまを往還する。水平の旅と垂直の旅が、線路の上で重なりあう。

二〇一七年初冬、私はサハリンを縦断する列車の中にいた。窓の外は真夜中のオホーツク海。乗り合わせたのは、一九三四年の樺太を旅していた林芙美子である。

——これは、昨年三月に WOL 岩波で連載を始めた「天涯の声 プロニスワフ・ピウスツキへの旅」の冒頭部分です。紀行であり評伝であるこの作品は、サハリンの鉄道から始まり、ポーランドへと続くはずでした。コロナ禍で海外取材ができなくなり、現在は中断していますが、国境の島であったサハリンを鉄道で縦断した経験と、旅の途中で時をこえて知り合った作家たちのことをお話ししたいと思います。

梯久美子（かけはし・くみこ）ノンフィクション作家。北海道大学文学部卒。『散るぞ悲しき』で大宅賞、『狂うひと』『死の棘』の妻・島尾ミホで読売文学賞、芸術選奨文部科学大臣賞、講談社ノンフィクション賞。他の著書に『原民喜』『サガレン』など。